明治学院大学文学部言語文化研究所主催

志賀理江子氏　講演会

写真表現と、私の体

２０２６年１月２４日（土）１５時～１７時

明治学院大学白金キャンパス　２号館 2401 教室

参加無料　どなたでもご参加いただけます

申込はこちらから→

お問合せ先：明治学院大学文学部言語文化研究所
mail: gengo2@ltr.meijigakuin.ac.jp
website: https://www.meijigakuin.ac.jp/gengobunka/

INTRODUCTION

16 歳の時、初めてカメラを手にして目前の光景を撮影し、
小さな 1枚の写真印画紙を手にした時の感激を、今も覚えている。
思春期、胸の膨らみと共に変化し始めた私の体は、
少なからず己の心身をも同時に苦しめた。
そして、その体とは、刻一刻と「死」に向かって流れ続ける
有限なる時間でもあると気付き、
その先に必ずある「死」に圧倒されてもいた。
写真世界とは「過去・現在・未来」には属さないイメージの時空間を
持っているのかもしれないと、私は写真行為を仮定し、
その時空間に全身を捧げて、私を「死」から守れというかの如く、
祈りを捧げるように撮影を行ってきたような気もする。
今も、写真行為でしか、見えぬものがあると、信じている。
そんな私にとって、写真で作品を制作することとは、
自分の体すべてを目の前の現実世界に放り込んで、交差させ、
全身全霊で思考するような、時には世界と踊るような、とても
ユニークな行為である。
今回のトークでは、そんな正解がない写真の謎について、話してみたい。

PROFILE

志賀理江子
写真家。1980 年、愛知県生まれ。
2008 年に宮城県に移住、その地に暮らす人々と出会いながら、
人間社会と自然の関わり、何代にもわたる記憶といった題材をもとに
制作を続ける。2008 年度木村伊兵衛賞、
2009 年に NY ICP インフィニティアワード
新人賞、また 2012 年、第 28 回東川賞新人作家賞受賞。
2011 年の東日本大震災以降、高度経済成長のデジャヴュのような
「復興」に圧倒された経験から、人間精神の根源へと遡ることを追求し、
様々な作品に結実させている。
主な個展に「ヒューマン・スプリング」（東京都写真美術館、2019 年）、
「ブラインドデート」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2017 年）、
「カナリア」（Foam 写真美術館、アムステルダム、2013 年）、
「螺旋海岸」（せんだいメディアテーク、2012–13 年）など。
現在アーティゾン美術館で「ジャム・セッション 石橋財団コレクション ×
山城知佳子 × 志賀理江子 漂着」が開催中。